

名古屋の街と博覧会

— 都市発展の軌跡 —



池田 誠一

【6】汎太平洋平和博覧会 …「大名古屋」の総仕上げ

1 昭和12年の名古屋

昭和9年。懸案だった新しい名古屋駅が着工しました。東洋一とされる新駅に対して、議会では博覧会でも開いて宣伝したらどうかという意見が出たようです。その意見がまとまり、11月の市会に意見書が出されました。それには、「…本市ノ紹介並産業文化ノ進展ト国際平和ノ親善トラ図ル…」意義で、博覧会を開催してはどうかという提案です。満場一致で可決され、市長に提出されました。

当時の名古屋市は、人口が百万人を突破し、都市計画に基づいて大都市の姿が次々と現れつつありました。名古屋駅ばかりではありません。名古屋港も第4期計画が進み、中央ふ頭や10号地が姿を見せ、貿易も急増していました。また11号地には国際飛行場が建設されていました。完成すれば、陸・海・空の国際的な新しい玄関が出来ることになります。意見書

は、それらが完成し、開港30周年になる昭和12年を節目に、大都市発展への画期にしようという提案したのです。

大岩市長は、即、県や財界と協議し、12年の3月15日から5月末日までの78日間、市が主催して一大博覧会を行うことを決めました。名は、「名古屋汎太平洋平和博覧会」。会場は、港の背後地、熱田前新田の一角です。今回は、このようにしてスタートした名古屋汎太平洋平和博覧会(以降、汎太博=当時の略称)を見てみたいと思います(図1)。



図1 汎太博の航空写真。
運河に沿ってパビリオンが並ぶ。中央奥が中央門(西と東)

2 わが国初の国際博覧会

(1)「汎太平洋」と「平和」

博覧会の長い名称にはこだわりがあったようです。「汎太平洋」については、万国博の「全世界」に対して遠慮した言葉と説明されました。というのは、15年(紀元2600年)に国が東京と横浜で万国博の開催を計画していました。そこで名古屋は区域を限って汎太平洋にするとしたのです。しかし、大々的に外国を招待して行う博覧会は初めてのこと。日本の国際博の魁になりました。

解釈が難しいのは「平和」です。これは「汎太平洋の平和」ということでしょうか、言葉の順序からいうとテーマ(目的)を示したものとも考えられます。しかし世情は、6年の満州事変の後です。軍備増強の時代で、陸軍は「平和」運動に神経質になっていました。その中で、あえて平和をテーマにしたのです。陸軍が許すはずがありませんでした。

ところが名古屋は上手でした。博覧会の総裁に東久邇宮稔彦王を担ぎ出したのです。王は名古屋とは縁が深く、5年から2年余滞在し、7年名古屋が新開発した自動車アツタ号の試乗者でもありました。皇室の陸軍中將が博覧会の総裁では、陸軍も公式にケチをつけるわけにはいかなかったようです。

(2)会場の位置と計画

会場になった熱田前新田は、江戸時代の干拓地です。名古屋港は伊勢湾奥の遠浅の海に造られました。そのため干拓が進んでおり、古い海岸線の熱田と新港とは5*₀近く離れることになりました。港は街から遠く離れた所であって、都市としても、港としても、その発展に大きな障害になってい

ました。

そこで博覧会の候補地の議論の中で、港の背後地、すなわち街と港を結びつけるために、その中間で開くことになったのです。商工会議所会頭の青木鎌太郎は回想記の中で、市の東部の公園予定地の議論もあったが、市の海外発展や港の発展のために港の背後地を推したと記しています。

さて、会場とされたのは15万坪(約50₀畓)です。明治43年の共進会の10万坪が意識されたのでしょうか。位置は、東西は堀川と中川運河の中間、南北は熱田と港の中間。まさに何も無い葦原が選ばれています(図2)。

会場は、まず南北に都市計画道路が建設され、市電が敷かれました。また東西は、中川運河の支線が取り込まれ、それを生かすよう計画されました。新設の道路と運河の交差す



図2 汎太博の会場の立地。港と街の中間に企画された

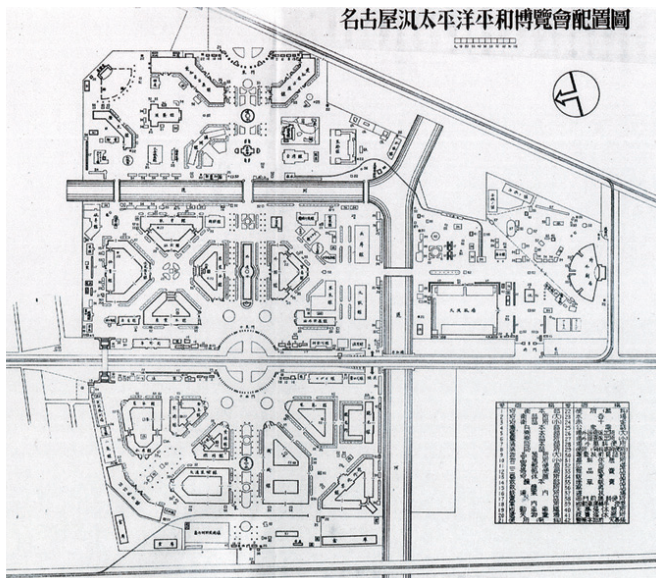


図3 汎太博の会場図(左が北)

る所には、「平和橋」が架けられました。また会場中央を東西に貫くグリーンベルトの中央には「平和塔」が建設されたのです(図3)。

(3)開催と成果

昭和12年3月、汎太博は華々しく開会しました。連日3～10万人位の客を集め、ピーク日は16万人近くになりました。そして78日間と短い期間でしたが、480万人を越える入場者になりました。

国際博としても、参加国は29か国に及び、東南アジアはもちろん、印度、豪州や、南米、北米の諸国、遠くは南アフリカまで、広い太平洋沿岸の国々を集めることが出来たのです。まさに名古屋は国際都市として世界に躍り出る機会を作ったといえそうです。そのうえ財政面でも、国、県、市から10万、15万、50万円という補助を得たというものの、収支は黒字になっています。

ただ、博覧会の狙いだった跡地を含む周辺土地の売却は思うようにはゆきませんでした。そのため東邦瓦斯などの地元大手企業が協力

することになりましたが、博覧会によって港と街との間は、確実に狭められたのです。

3 紀行 港明町付近

…活かされた大きな土地…

今回は、汎太博の開かれた港区の港明町付近を歩いて、博覧会の後の街の変化を振り返ってみます。

〈平和橋から〉

地下鉄名港線の港区役所駅の1番出口を出ます。そのまま通りに沿って歩くと、左側の車道

が盛土されて高くなっていきます。これが博覧会の時にできた運河を渡る橋、「平和橋」への上りです。進むと、運河は埋め立てられましたが、橋と高欄がそのまま保存されています。運河は埋め立てられ、付近は区役所、図書館、バス車庫、公園等の公共空間に変わっています。

橋の下につけられた通路を通して西側に出ます。そのまま運河跡を進むと、行き止まりの先には運河が残っていました。遠くに貨物線の橋も見えます。その先は進めないのでも



保存された「平和橋」。
4隅の高欄の親柱が残っている



残っている中川運河支線。
遠くに貨物線の橋梁が見える

に、ゴルフ練習場やガススタンドのわきを抜けます。この西側一帯は、博覧会の後、東邦瓦斯が買い取り大きな化学工場が造られました。しかし、原料が石炭から石油に代わるとともに港の先に新しい工場が出来、ここは廃止されました。北に進むと、その工場の入り口の跡が残ります。なかを見ると広大な空間が広がっています。博覧会会場はこの付近の東西方向に中央の通りが造られ、その東側正面には「平和塔」が建てられていました。

さらに北に進み、工場跡の周りを東、北と廻ると西側の突き当たりは貨物線です。博覧会の名古屋駅からの客の多くは、この鉄道で会場内に引き込まれた臨時駅に運ばれました。貨物線に思いをめぐらした後、東に引返し、そのまま進むと拡幅された幹線道路です。道



廃止されたガス工場跡。新しい開発に着手した。
平和博のシンボルが欲しいところ



貨物線。この付近から左に会場へ分岐していた

路の南側に博覧会会場の中央ゲートが東西にあったのですが、今では高速道路がその想像を難しくしています。

〈港北公園を抜けて〉

幹線道路を通り過ぎさらに東に進みます。この線が会場のほぼ北側の線でした。中学校に突き当たるので右に回り東の幹線道路(国道)に出ます。会場の東側はこの通りで、すでに市電が走っていました。その西側の会場跡は、今は学校や大きな病院になっています。

その病院を、突き抜けて南西の門を出ます。少し西に水道局の営業所がありますが、ここは運河の支線が南北に通っていた所です。北に進むと、右側に見える病院の宿舍の向こうに、博覧会のシンボルの「平和塔」が建っていたのです。

南に引返して、高速道路の下の方港北公園に



跡地は、大きな病院の敷地にもなった



この奥の右手に「平和塔」が建っていた

出ます。ここも運河の跡です。少し西に行き、公園と高速道路が分かれる辺りで左の小学校の東の道に入ります。会場の運河の南は娯楽施設が集められていました。人間プロペラなどというアクロバットなものもあったようです。そして学校の東の通りは子供汽車が走っていました。



運河の跡は、公園になり、高速道路が計画された



会場中央に建設された幹線道路。遠くに平和橋が。
今は地下を地下鉄が通る

南に突き当たった所が会場の南側の線になります。50[㌔]という土地は、博覧会后各企業に売却され、工場用地になりました。そして戦前戦後の名古屋の産業を支えました。その後、市街がこの辺りにも及んでくると、工場はさらに臨海部に移り、跡地は次第に住宅や大規模敷地を要する産業へと転換されたようです。西に進むと平和橋の架けられた幹線道路です。その道を右に少し行くと出発点の港区役所駅があります。

4 国を背負う心意気

汎太博当時、驚くべきことは、名古屋の視線の高さです。その頃盛んに語られたのが「東洋一」という言葉でした。名古屋駅も、東山動植物園も東洋一が売りでした。もう一つ特記すべきなのが、国を背負ってものを考えていたことです。日本は太平洋地域のリーダーであり、その平和と文化産業の発展に尽くす必要があると。だから名古屋が博覧会をやるのだ、と全国に宣言したのです(ラジオ全国放送)。

不幸にも、汎太博終了後1か月半ほどで日中戦争が始まり、日本から平和という言葉が消えてゆきました。しかし、名古屋が、陸軍に抗して、太平洋の平和を堂々と主張したことは、歴史的事実として残っているのです。

残念ながら、今そのことを思い起こすことができるのは、道路に残された「平和橋」だけになってしまいました。

〈主な参考文献〉

- ①「名古屋汎太平洋平和博覧会」 (1938年、同会誌)
- ②同編集委員会『新修名古屋市史⑥』
(2000、名古屋市)
- ③亀田忠男『大岩勇夫と大名古屋』
(2001、社地域問題研究所)
- ④浅見雅男『不思議な宮さま』 (2011、kk文芸春秋)